その五

嶺村法子

私たちの幼稚園では、「保育をご覧になりたい方はいつでもどうぞ」と声をかけています。保護者の方は、登降園時に保育室を覗いたり、PTA活動の合間に子どもたちの遊ぶ様子を見たり、また、数日間の公開保育の時には、都合のよい時間に、いろいろな場面を参観したりしています。

そうした普段の生活を見ていただく参観の他にもいろいろな行事があります。子どもたちと一緒に活動していただく保育参加型の〝わくわくランド〟や親子遠足、作りためてきた作品を見ていただく〝わくわくギャラリー〟など、親も子も保育者もわくわくできる企画をと考えています。

今年の〝わくわくギャラリー〟には、運動会で踊っている自分の人形を作ってみんなで飾ろうということになりました。

〝わくわくオリンピック〟で
魔女と　忍者と　王子と　姫と
ピーター・パンと
ティンカー・ベルになった子どもたち
苦労して作った衣装は
ぼろぼろになるまで着て楽しんだ
今度はその衣装を
自分と同じ大きさの人形に着せて
お母さんたちをびっくりさせちゃおう！
と考えた

TO・NI・KARA ひろば

風船をふくらます
自分の顔と同じくらいになったら
ぎゅっと結んで…
「あっ、飛んでっちゃった」
シュルルルルルル…
風船はあちこちぶつかりながら
頭上を行き交う
大きくなりすぎたとか
結べないとか
理由をつけてロケット遊びも楽しみながら
やっと自分の顔の大きさが決まる

のりと水をぐちゃぐちゃ混ぜて
刷毛でたっぷり紙につけて
藁半紙をペタペタ貼っていく
ぺちゃくちゃおしゃべり楽しみながら
「これくらいでいいかな？」

▲「こんな感じでいいかな？」 丁寧に慎重に仕上げの色を塗る

TO・NI・KARA ひろば

「ここのところがまだ透けてるよ」
「紙を丸めて鼻も付けよう」
何日もかけて幾重にも隙間なく貼り終えた
「風船がこんなに重くなっちゃったよ」

休みあけの月曜日
「うわあ、かちかちになってるよ！」
風船はげんこつでたたいても割れない
張りぼてに大変身
「さあ、風船が乾いた人は、プスッと穴をあけるよ」
「ええっ」
「やだあ、割れちゃうよ」
「さあてどうなるでしょう？　いくよ！」
結び目をぐっと引き張って
ハサミでちょきんと切り込みを入れる
中からすーっと風が吹いてきて

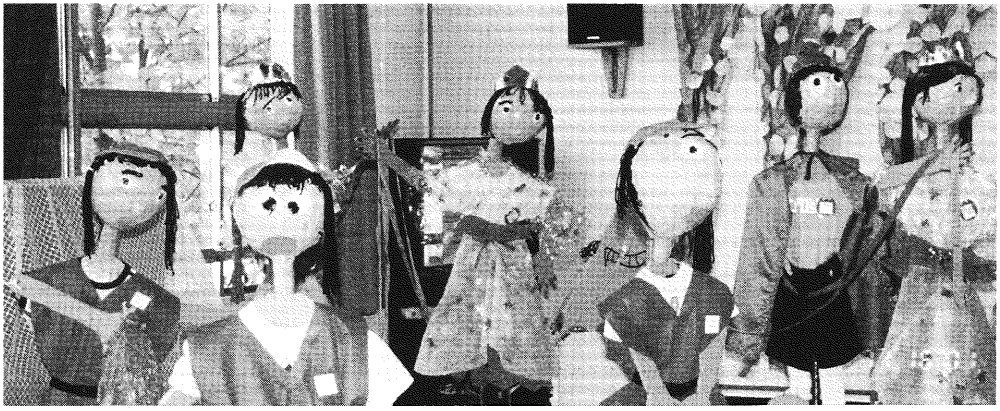
パリ、パリパリッ
ピリ、ピリピリッ
と　風船が紙から離れる音がする
「涼しいっ！」「くすぐったあい！」
取り出した風船を見てびっくり
「ひゃあ、風船がぐにょぐにょだ」
「ぼくの途中で切れちゃったよ」
小さな穴から張りぼての中をのぞき込むと
しぼんだ風船の残骸が見える
中の藁半紙に
風船のプリントが印刷されているのを発見
「あ、風船の絵が写ってる！」

長い時間をかけて
のりまみれになりながら作り上げてきた顔も
いよいよ仕上げの色塗り段階
「顔の色ってどんな色かなあ」

TO・NI・KARA ひろば

「赤と白を混ぜて…」
「あ、ピンクになった」
「黄色も入れてみようよ」
「なんかちょっと白すぎない？」
「じゃあ、茶色も混ぜよう」
「こんな感じ？」
「手の色と比べてみようか」
「うん、これでいいよ」
自分の肌の色を塗る
白目を描き　口を描き
黒目を入れ　髪の毛を塗り
黒い毛糸で前髪や眉毛や
おさげを作ってくっつける子もいる
かちかちの張りぼて風船が
すっかり顔らしくなってきた

針金ハンガーに



▲「できた!!」　もうひとりのわたしが踊り出す

TO・NI・KARA ひろば

自分の洋服をつるして顔をのせ
魔女や忍者　王子やお姫さまなど
それぞれの衣装を上から着せる
段ボールをごりごり切って作った
手と足をひもでぶら下げる
すると
手間暇かけて作り上げた人形は
作り手の雰囲気を身にまとい
そこにもうひとりの
〝わたし〟が現れ出る

子どもたちが帰った後の保育室で
視線を感じて振り返ると
そこには魔女のはっちゃんや
忍者のもえちゃんがいて
じっとこちらを見ていたりする…
毎日ひとりふたりと増えていき
ついに　二十三人が勢揃い！
遊戯室に
ジンギスカンを踊ったあの秋の日が
よみがえる

こつこつと根気よく積み重ねていく作業をあえて選んで提示する。好奇心から始めたその作業にいつのまにか引き込まれ、それぞれに作り上げていく楽しさや喜びを見出していく。自分の手でもうひとりの自分を創り出せる喜びが、地道で困難な作業を楽しさに変えていく。

その結果としての作品を身近な大人から認められたとき、これまでの楽しさや喜びは確かな自信となって自分の内側を支える力になる。得意になって会場を案内する子どもたちの顔は、喜々として輝いていた。

（中央区立月島第一幼稚園）